

## 43 清（さや）地蔵

天王寺区夕陽丘町5-14

- ▶ 陸奥宗光の最初の妻 蓮子が亡くなった明治5年(1872)に、亮子と再婚をします。亮子との間に生まれた長女 清子(さやこ)が翌年に生まれました。しかし、明治26年(1893)に若くして亡くなります。宗光と亮子は、その死を悼み、等身大の地蔵尊を陸奥家墓所に設けました。



## 44 薩摩藩家老 小松帯刀墓所跡

天王寺区夕陽丘町5

- ▶ 幕末から明治にかけて活躍した薩摩藩 小松帯刀の墓所が陸奥家墓所跡付近にありました。小松帯刀は明治に入り、外国事務局判事に任命され新政府に出仕しましたが、体調が芳しくなく、大阪にて蘭医ボードウインの治療を受けていました。(明治2年7月)しかし、治療の甲斐もなく明治3年7月20日大阪で永眠します。「小松帯刀伝」によると即日大阪府天王寺村夕日ヶ岡に神葬されたとあります。明治9年10月、鹿児島県日置郡の圓林寺の改葬されるまで、6年間この地に眠っていました。『大阪府全志』第2巻や『夕陽丘の回顧』などの本に、陸奥宗光墓所跡の前後に、小松帯刀墓所について記載されていることから、この付近であることがわかります。



薩摩藩家老 小松帯刀

## 45 藤原家隆墓所(家隆塚)

天王寺区夕陽丘町5

- ▶ 藤原家隆は藤原定家と並ぶほどの歌人と評され『新古今和歌集』の撰者の一人で従二位の位を授かりました。78歳の高齢で初めて京都を離れ、ここに庵を作り日想観を修めながら住みました。日想観は、かつて四天王寺より西に難波の海が広がっていた頃、西門から望む光景が極楽浄土へ続く入り口として信仰されたことに由来する修行のことだそうです。藤原家隆は翌年この地にて永眠しました。





## 46 麻田剛立墓所（浄春寺）

天王寺区夕陽丘町5-3

- ▶ 豊後杵築にて儒者綾部綱斎の4男として生まれます。幼い頃から天文・暦術に関心を持ち、独学で研究しました。藩に出仕したため研究が出来ないため脱藩し来坂します。「先事館」という天文・暦術の宿を開き、門人に高橋至時、間重富、山片蟠桃などが集まりました。幕府から改暦のため出仕を命じられましたが、老齢を理由に辞退し、門人の高橋至時、間重富を推挙しました。



## 47 松尾芭蕉墓所（梅旧院）

天王寺区夕陽丘町1-18

- ▶ 生涯松尾芭蕉の顕彰に尽力した俳人 不二庵二柳（ふじあんりにりゅう）が、朽ちていた松尾芭蕉の墓を修復しました。その横には自身の墓が並んでいます。



左手前が芭蕉の墓碑



不二庵二柳の顕彰碑

## 48 芭蕉堂（梅旧院）

天王寺区夕陽丘町1-18

- ▶ 不二庵二柳は、俳諧の低俗化や遊戯化を憂い、芭蕉の精神に戻り芸術性を持たせようと運動を起こします。天明期、梅旧院に芭蕉堂を建てました。大正期、朽ちてきたところを松瀬青々が復元をしています。



芭蕉堂



芭蕉堂修復記念句莚

## 49 豊臣秀吉木像安置の地（珊瑚寺） 50 戦国武将 桑山重晴墓所（珊瑚寺）

天王寺区夕陽丘町1-21

- ▶ 賤ヶ岳の戦（1583）で軍功を挙げた桑山重晴の菩提寺です。  
桑山重晴は慶長3年（1598）に出家し、珊瑚寺の本堂を再建して秀吉の木像を安置しました。  
慶長11年（1606）83歳の高齢で没します。  
珊瑚寺には五輪塔が建てられました。



太閤秀吉公と刻まれている

## 51 桑名藩 黒沢翁満墓所（珊瑚寺）

天王寺区夕陽丘町1-21

- ▶ 桑名藩士として桑名藩大坂蔵屋敷留守居役を約10年間務めました。  
その間、国学を主とした読書と著作に明け暮れ、平均睡眠時間は2時間だったといわれています。



黒沢翁満墓

## 52 織田作之助文学碑

天王寺区夕陽丘町5

- ▶ 織田作之助は、大正2年（1913）大阪市南区生玉前町（現天王寺区上汐町4丁目27）にて、仕出屋「魚春」の織田鶴吉、たかゑの長男として生まれました。  
昭和6年（1931）、旧制大阪府立高津中学校（現大阪府立高津高等学校）を卒業し、第三高等学校文科甲類（現京都大学教養学部）に合格しました。  
作家活動を始め、「夫婦善哉」を発表し著名になります。  
織田作之助の作品「木の都」は、昭和19年（1944）「新潮」に発表された作品で、大阪的庶民気質や大阪人情への深い共感が読み取れる作品です。  
文学碑には次のような記載があります。



口縄坂は寒々と木が枯れて、白い風が走っていた。私は石段を下りていきながら、もうこの坂を登り降りすることも当分あるまいと思った。青春の回想の甘さは終わり、新しい現実が私に向き直っているように思われた。風は木の梢にはげしく突っ掛かっていた。

織田作之助「木の都」より

## 53 口縄坂

天王寺区下寺町2-2、夕陽丘町5

- ▶ 下寺町2 稱名寺の北側から東へのぼる坂です。口縄とは蛇のことであり、坂の下から眺めると、道の起伏が「蛇(くちなわ)」に似ているところから、この名が付けられたといえます。口縄坂を登ると前記の織田作之助文学碑が右手にあり『口縄坂は寒々と木が枯れて白い風が走っていた…』と代表作「木の都」の小説の一節が刻まれています。また、司馬遼太郎の「燃えよ剣」では、新選組副長の土方歳三が口縄坂の場面で登場します。小説では次のとおりです。(新潮文庫 下巻 P192)

「なんと言う坂だ」「へい、くちなわ坂、とこのあたりではよんでいます」と駕籠かきがこたえた。「おかしな名だな」「べつにおかしくもございません。坂の上へのぼりつめてごらんになればわかります。」なるほど登りつめてから見おろすと、ほそい蛇(くちなわ)がうねるような姿をしている。「それでくちなわ坂か」歳三は、この土地の即物的な名前のつけかたがおかしかった。



## 54 富永仲基招魂碣(西照寺)

天王寺区下寺町2-2-45

- ▶ 醤油醸造業「道明寺屋」に生まれ、10歳で「懐徳堂」に入塾。三宅石庵から学びます。多くの書物を読破し、師の三宅石庵を批判する「説蔽」という著作を刊行しました。三宅石庵の怒りを買い、富永仲基は懐徳堂を破門されます。その後は独学でますます学問を勉強しました。やがて、人の倫理の基範である仏教・儒学・神道を激しく批判する「出定後語」を出版します。後に本居宣長はこの「出定後語」を高く評価したといわれます。しかし、35歳の若さでこの世を去りました。

